nowhere

nature and fashion vol 3

NOWHERE　自然とファッション　vol.3 / 2017 AUTUMN 発行・編集人　中川華

秋澄む

春にはなくて
夏にもなくて
冬にもないもの
秋の空気というのは秋にしかだせない
とろっとしているわけでもなく
ぴっとするどいわけでもなく
すうっと
するりと流れてくる

ものが美しくみえて
鳥の声や物音も響くようなかんじ。

きらきらと
ひかる
それは
澄むと同時に

わたしたちと一緒に住んでいるのではないかと思わせる。

WORD BY SARINA TAKANASHI

WEAR A SCENT

“Smell is a potent wizard that transports you across thousands of miles and all the yearsthat you have lived.”

Helen Keller

香りには、遠く離れたところや遠い昔まで、
あなたを連れていく魔法の力がある。

ヘレン・ケラー

TO SEE BEHIND WALLS

秋風に飛ばされた落ち葉に　雨上がりの路地
朝のすんだ空気や　挽きたての珈琲
太陽をあびた洗濯物、おふろのシャボン、、、

わたしたちの住む世界には、あらゆる香りが溢れている。目には見えないけれど確かに存在していて、わたしたちは香りに癒しを求めたり、自分のどこかに染み込んだ香りに時たま記憶が喚起され気持ちが大きく揺さぶられたりするのだ。いい香りに思わずお腹が減ってしまったりもする。

古代の人々は、香りを神と人を繋ぐものとして扱った。現在も仏教をはじめ、世界の様々な宗教と香りは深い関わりがある。神聖な捧げものだったり、するのだ。

身に纏うときも、香りの発揮する力は驚異的だ。ふんわりと見えないようでいてルックス同様、嗅覚で感じとった情報として、勝手に纏う人のイメージを作らせてしまったりする。そしてその香りが消えても、その記憶は変わらず残り続けるのだ。

平安時代、貴族の男女は直に顔を合わせることができなかったため、自分の存在を香りでアピールした。ステイタスシンボルとして、自ら調香してオリジナルの練香をつくっていたという。また、14 世紀のヨーロッパでローズマリーを蒸留してつくられた香りが現在の香水の起源だと言われている。いやな臭いを紛らわせるために作られたものだったが、やがて様々な香料植物が育てられるようになり、そこから採れた香りを調香することで新しい香り、香水が嗜好品としてつくられるようになった。

ファッションとして、特別なときのお守りとして。
自分の一部のように香りを纏うこと。
それは日々の生活に心の躍るような深みつくってくれる、まさに魔法のようだとおもうのだ。

WEAR A SCENT/ 香りを纏う

SPECIAL THANKS

秋澄む
Sarina Takanashi
model
Arisa Kamada

photo and text
中川 華　Hana Nakagawa

070-2323-0449 / yuzunakahana@gmail.com / 087km.com